

リベラル教育と民主主義 アメリカにおける大学のシチズンシップ教育

キャサリン・テグマイヤー・パク セント・オラフ大学准教授

私が最も関心を持っている市民活動教育について、皆様との討論に加わることができることは大変栄誉なことと思っています。私は日本の大学における市民教育について研究してきましたが、その過程で和光大学の多くの先生方が、忙しいスケジュールにもかかわらず、私のために時間を割いて下さり、教授してくださいました。その和光大学を再び訪れることができたことは大きな喜びです。



その研究に関連したふたつの考え方を、今日皆様と分かち合いたいと願っています。第一に民主主義社会における高等教育の重要な目的は、積極的に参加する市民を育てることにあるということを確認したいと思っています。第二にアメリカでは実際にどのように実践されているのかを皆様にお話ししたいと思っています。

学生たちに最善の教育を与えるためにお互いから学びたいと願っていますので、皆様の意見をぜひ聞かせて下さるようお願いします。

——活動的市民を育てるリベラル教育

まず活動的市民とは何かについて私の定義から説明したいと思います。

活動的市民とは、地方、国、世界を問わず、直接公共的活動に関わる者です。公的な問題を認識し、公正かつ効率よく対処し、解決方法を見出し、実行できる知識と技術と理解力を備えている者です。活動的市民は寛容、公正、法治主義といった民主主義の理想に献身する者です。そして、多様な考えや民主的に討論する人々を認め合うことに努めます。

この定義は、私のこれまでの仕事の歩みから出ていることです。私の勤めている大学、セント・オラフ大学はミネソタ州にあります。アメリカの中央の北にあ

ります。私たちがいる町は、ミネアポリスの南隣にあるノース・フィールドという人口2万人の小さな町です。町には大学が2つあるのですが、2万人のうち、私の大学の学生が3000人、隣の大学の学生が2000人で、人口の4分の1は大学生という大学の町です。セント・オラフ大学は1874年にノルウェーからきた移民が自分の子どもや孫たちのために設立した大学です。設立当初からリベラル・アーツ・カレッジで、当初から大学では学生に自由に考えるように教えていました。

次に、これが私たちには何を意味するかをお話しします。ご存じのようにアメリカにおけるリベラル教育は地域社会に貢献し、公共に携わるものと密接な関係があります。歴史的にアメリカ人は、リベラル教育の目的は、真の自由と民主主義の約束と責任を100パーセント果たすために必要な才能と習慣を育てることにあると理解してきました。

日本語で新しい表現を作るとしたら、ちょっと大胆かもしれませんが、リベラル教育は「自由伝授」と言えるのではないのでしょうか。その意味をもう少し説明しましょう。政治思想家は、民主主義について心配をしていました。市民が公共の利益について、思いやりを持って明確に考えるよう努力することなくしては、民主主義は確立しないと考えていました。そして賢くて考え深くて責任感のある市民を望んだのです。一部の政治思想家は教育がこのような市民を産み出すと信じていました。これが人々に自由になることを教えるリベラル教育の発祥です。

現在、アメリカ大学協会では次のようにリベラル教育を定義しています。

リベラル教育は、複雑性、多様性、変化に対応できるように個人個人に力を与え、備える教育である。特定の分野における深い学びと同時に、科学、文化、社会などの幅広い世界の知識を提供するものである。リベラル教育は、コミュニケーション能力、分析的問題解決力、知識と技術を現実社会に適用できる能力などのような強力で応用のきく知的で実証的技術のみならず、社会的責任をも育てる¹⁾。

—— セント・オラフ大学での活動的市民性の教育

リベラル教育といえば、アメリカではどの大学でもやっていると思いますが、リベラル・アーツ・カレッジにおいては、もっと特徴的です。このような技術と知識を、大学生を対象として、学生と教員が生活を共にしながら、親密な関係の中で教えています。学生たちのほとんどは寮の中に住みながら勉強をしています。セント・オラフ大学ではこの比率は高く、96パーセントが大学の寮に住んでい

1) アメリカ大学協会 (American Association of Colleges and Universities) によるリベラル教育の定義は協会のサイトで見ることができる。http://www.aacu.org/leap/what_is_liberal_education.cfm

ます。4年間ずっと、一緒に授業を受けている仲間と一緒に食堂に行ったり、遊んだりしています。教職員たちも一緒に毎日そこに行ったり来たりしています。

私は「良い市民を育てることが大学の役割」だという信念を持ちつづけている学校で教えているということになります。そのことは私の考え方にも大きな影響を与えています。

アメリカではどのようにして活動的市民の育成と市民活動の教育を実施しているのか、ある学者が言ったように、全ては教職員の資源と想像力という2つの要因にかかっています。セント・オラフ大学での例をお話ししましょう。

私たちは資金と想像力の両方を持ち合わせています。資金は大学の一般予算と、時々与えられる特別補助金のことです。学生活動事務室と「体験学習センター」(The Center for Experiential Learning)の30~40人のスタッフが、学生のプログラムを管理して、広報をしてくれます。スタッフ、学生、教職員の中には活動的市民を生み出すためのよいアイデアを持っている人が必ずいます。最も大切な事は、誰かにいいアイデアが浮かんだら、誰がそれを実現してくれるかを知っていることです。もうひとつ付け加えると、地元の団体も常に資源とアイデアを提供してくれます。彼らの協力がなければ、私たちはこの仕事を絶対にできません。

具体的に話していきましょう。セント・オラフ大学ではいろいろな方法で活動的市民になる教育をしています。その中で3つの主要な方法と具体例を挙げたいと思います。

—— ボランティアと政治的活動

第1番目のカテゴリーは大学からの支援を受け、学生自治会と学生課によって組織化されるもので、学生が自主的に200以上のクラブを設立し参加しています。彼らは資金援助を受け、ホームページを与えられ、大学の施設利用を許され、イベント企画の手助けを受けますが、グループは学生たちが作ったものです。活動的市民に密接に関連している二つの活動について、具体的にご紹介します。

最初に紹介するオル・スプリング・リリーフ (Ole Spring Relief) というグループは今年で6年目になります。2005年にニューオリンズに大きな被害をもたらしたハリケーン・カトリーナの被害者支援のために学生たちが始めたボランティア活動です。学生たちは春休みを利用して、災害の後片付けをしに行きました。それ以来、毎年100名から200名の学生とスタッフが一緒にニューオリンズまで手伝いに行っています²⁾。

大学に集まった学生たちはバスでルイジアナ州に着きます。学生は教会の施設に泊まり、教会のネットワークを使って被害にあったところに手伝いに行きます。

2) この様子は以下の動画サイトで見ることができる。<http://www.youtube.com/watch?v=Cmi5Gv20XAU>

もちろん地元の人たちとの連携が大事です。このグループを立ち上げた学生は優秀で、オックスフォード大学の修士課程に進学しました。真面目に勉強しながらでも、こうした活動ができるのです。

ボランティア活動の例をもうひとつ挙げますと、学生たちを選挙に参加させることを目的とした政党の党支部があります。学内に民主党員グループと共和党員グループがありますが、共和党グループは最近元気がなく、オバマ大統領当選の選挙の後、活気がなくなりました。大学の共和党グループの代表は、卒業後に全国党员組織の代表になりましたし、民主党グループの代表は卒業後に州組織の代表になりましたから、かなり活発に活動しているといえます。

——準カリキュラムと機会提供

第2番目のカテゴリーは「準カリキュラムと機会提供」と呼びます。大学のスタッフと教職員のサポートを受けているものの、公式のカリキュラムには含まれていない活動です。スタッフと教職員がサポートしますが普通の授業と違います。準カリキュラムのプログラムに参加するために、学生は申し込みをする必要があります。その過程において、教職員およびスタッフとの交流がいろいろあります。そのタイプの中で2つの例を挙げたいと思います。

1つ目は Leaders for Social Change といひまして、日本語では「社会改革の指導者」という仰々しい名前になります。具体的な内容は、町やその周辺にあるNPO団体でのインターンシップです。夏休みの間に合宿し、夜は先生と一緒にゼミをやりながら、昼はNPOに行つて活動をします。それをやりながら、大学からお金ももらえますから、家がお金持ちでない学生でも奨学金がもらえてインターンシップに参加できます。毎年、9人か10人がやっています。

2つ目の例は「平和と正義インターンシップのためのクロック・ジェンセン奨学金」というものがあります。この奨学金はセント・オラフ大学だけのものですが、自動車事故で家族ともども死亡した政治学の博士課程にいた同窓生を記念する奨学金です。亡くなったときに、彼の友達と親戚が特別な基金を作ろうと決めて、社会正義を推進するインターンシップを申し込んで入選した学生たちに1000～4000ドルの奨学金を支給します。

対象となるインターンシップは、いろいろなところのインターンシップが可能で、学生たちは自分たちで探し出したところに行きます。アメリカ国内でも国外でもOKです。去年、この奨学金をもらった学生の一人は日系四世で、彼女が行った先のプロジェクトが日系人強制収容所の研究プロジェクトで、マンザナ強制収容所の研究をしました。もう一人は両親がカンボジア難民で、カンボジアに行つてインターンシップをやりました。

——大学市民活動

第3番目のカテゴリーである大学市民活動（Academic Civic Engagement＝ACE）という市民活動教育は、私たちの通常の授業の中で行われています。長い間多くの教授がこの方法で教えてきましたし、他の教授たちも学内の教職員研修に参加してから、最近この方法に取り組む人たちも増えてきました。

最近、このプログラムに参加した人たちの中で、もっと大学内の活動を把握するために、目標をはっきりさせようという動きも出てきました。その動きの中で、この夏に目標が明確化しました。

私たちはACEのクラスを取った学生に7つの成果を期待しています。

- ①市民としての知識（Civic knowledge）——市民組織・共同体組織の社会的、政治的、歴史的コンテキストについて述べるができるようになることが期待されています。
- ②市民としての学び方（Civic learning）——市民の目標、共同体の目標への貢献の中で、アカデミックな知識と熟達（書くこと、話すこと、チームワーク、批判的で創造的な思考、情報リテラシー、異文化適応能力、数量化能力）を応用することができることが期待されています。
- ③市民的自己理解（Civic self-understanding）——自分のアカデミックな知識や熟達を評価する能力です。
- ④市民的反省能力（Civic reflection）——市民や共同体の目標と到達度を記述して評価する能力です。
- ⑤市民的有効性（Civic efficacy）——市民や共同体の努力に対して有効に貢献できるという、自分の能力への信頼性です。自分が活動して学んだことで、世界に出てからいろいろなことが改革できるという自信を持つような勉強とでも言えいいでしょうか。
- ⑥市民としての活動（Civic action）——公益を伸ばす役割を担える市民の、共同体の、仕事の役割をはたし参加することです。
- ⑦職業上の統合（Vocational integration）——自分の知識やスキルを個人的、市民的、仕事上の役割に貢献するためにどのように使えるかということ表現できるようになることです。Vocationalはセント・オラフでは特別な意味がありまして、自分の人生のために自分の道を分かるための勉強ということなのです。

これら7つの条件について、セント・オラフの大学市民活動の中の授業では、少なくとも1つは踏まえて欲しいと決めたのです。

現在の開講科目表を見ると、ほぼ全ての専門分野において活動的市民を養成す

ることができることがわかります³⁾。1年間に28科目が大学市民活動の中に入っています。例えば、心理学もありますし、私が教える「アジアのナショナリズム、宗教、グローバリズム」もありますし、中国についての授業、環境についての授業も、美術もあります。どのような分野にあっても、上記のような教育が可能だと思っています。ニューロサイエンスの授業は最新科学の授業ですが、地元の行政等と連携しながら学生たちが勉強します。それが毎年、28～30科目あります。

次の例は、学生たちが、2年間に連続した4つの科目にずっと続けて同じグループで参加するものです。“Exploring Community and Citizenship at St.Olaf College”といって、周辺のコミュニティとかシチズンシップについて一緒に勉強しましょうということ⁴⁾。学生たちが授業の中で協力して大学周辺の歴史や市民について勉強します。

1番目の科目は“Civic Engagement: Voting and Citizenship”でした。ちょうど、この間の大統領選挙があった時に、学生たちが周囲の小学校、中学校、高校へ選挙のことを説明しに行きました。そしてその町の人たちの選挙登録の活動をやりました。

2番目の授業は“Local Vistas and Sustainability: Making and Re-Making Landscapes”という授業です。地図に注目して、地図と歴史についての勉強をしました。学生たちは、1年中この町に住んでいますが、こういう活動をした後では、自分の町を身近な存在とを感じるようになったと話していました。

3番目の授業は“Immigration and Ethnicity in the Local Schools”という移民と民族と学校についての授業です。

4番目の授業が最後で2年生の時になりますが、ラジオ番組を学生たちで作りました。みんなでいっしょにグループかベアでやって、ミネソタ州以外にも広く流れました。Tシャツも作りました。

こうしたものを支えるのはセンターの専属スタッフで、彼がいるために出来ることが広がっていきます。学生たちは大学と自然や町のさまざまなことが繋がっていると理解します。小さい町なのに、経済的発展からいっても政治的発展からいってもとても面白い歴史を持っているということが分かります。

—— キャンパス・コンパクト (Campus Compact)

次にセント・オラフ大学での試みがアメリカ高等教育における一般的な市民教育とどのような関わりがあるのかをお話します。

3) コースカリキュラムについては、以下のサイトを参照のこと。

http://www.stolaf.edu/services/cel/FacultyStaff/ACE_Courses_10_11.html

4) 以下のサイトの写真を参照のこと。<http://mncompact.wordpress.com/2010/09/03/civic-restlessness/>

市民教育はセント・オラフ大学だけに限定された動向ではありません。リベラル教育のゴールは、何世紀にもわたって民主的政府が求めてきたように、自由な市民を生み出す知識と知恵を提供することでしたが、このトピックに関しての議論が再び盛んになってきたのは最近のことです。

1980年代半ばにおいては多くの学者やジャーナリストたちは、アメリカやヨーロッパの民主国家の国民が公共活動や選挙に関心なくなってしまったことを懸念していました。ちょうど私が学生の頃です。若者たちの間に見られる利己主義や極端な個人主義を心配したのです。アメリカの大学の学長や教職員たちは市民教育に配慮した高等教育を推進するために協力を始めました。無関心や無気力を解消するために、既存のプログラムを強化し、財団法人、シンクタンク、専門調査会を創設しました。

1990年代の後半にはアメリカ人とヨーロッパ人は自分たちのプログラムの記録を比較しあうようになりました。今では数多くの国際的協力体制があり、世界的に高等教育の中で民主主義への参加や活発な市民活動を推進することに専心しています。EUにおいては活発な市民活動は政策の公式目標であって、加盟政府の注視と報告が義務付けられている4つの主要長期的戦略的目標の1つです。

その結果、セント・オラフ大学の同僚や私が市民活動教育を向上させたいと願うときに、そのための資源は私たちの大学だけにとどまらず、大学の外からも得ることができるようになりました。また市民活動を教えるために他の大学ではどんなアイデアを持っているかも、きちんと文書化されています。これに関して、重要な財団法人の一つである「キャンパス・コンパクト」を紹介します⁵⁾。

キャンパス・コンパクトはアメリカ国内だけのものですが、他の財団法人には国際的なものもあります。キャンパス・コンパクトは、1985年にブラウン大学、ジョージタウン大学、スタンフォード大学の学長および諸州政府教育協議会によって設立されました。

今日ではキャンパス・コンパクトは、高等教育の市民教育に力を注いでいる1100以上の大学の学長の連携組織で、600万人の学生が含まれています。アメリカの中で大きい組織で、50州のうち35州に支部を持ち、ボストンに本部があります。

キャンパス・コンパクトのビジョンと目的は以下の通りです。

キャンパス・コンパクトは大学というものを、学びを深め、コミュニティ生活を向上させることによって、学生を責任感ある市民として育てる教育を任務とする重要な責任主体であり、多様な民主主義の設計者だと見なしています⁶⁾。

5) キャンパス・コンパクトについては、以下のサイトを参照のこと。<http://www.campuscompact.org/>

6) 原文は以下のサイトを参照のこと。<http://www.campuscompact.org/about/history-mission-vision/>

この組織の特徴は学長が作っている組織であるということで、トップとして力を入れていて、トップの方から学内にいろいろ説明があるために、私たち教員がとてもしやすくなります。この教育を推進したいと願っている私たちには、このことは非常に重要です。自分の大学だけでなく、もっと大きな組織から認められていることが認識されていると、プロジェクト参加を同僚に呼びかけたり、事務担当者に協力を依頼することが容易になります。

キャンパス・コンパクトにどんな資源があるのかは、ホームページに出ています⁷⁾。例えば、Resources のページを見ると、いろいろな資源が並んでいますが、さらに overview を見ると、教員向け、学長向け、市民団体のため、学生のためのいろいろなページにリンクが張ってあります。教員向けのページには、シラバスや助成金の情報や、連絡できる教員の情報、いろいろなモデルの紹介があります。最初から始めようという場合にも、すぐに情報が得られるようになっています。

こうした組織には大学のための助成金もあります。私の大学もミネソタ州キャンパス・コンパクトの基金から補助金をいただいて、和光大学における教育GPのように、補助金のお陰でいろいろな活動がやりやすくなりました。

——和光大学の市民教育

私はこれまで市民活動教育についてアメリカでの体験を話してきました。最後に、優れた市民活動教育を行っている和光大学に注目してみましょう。

アメリカのことをもう少しお話ししますと、市民教育の大規模な評価研究を行っているアメリカの指導的研究者である Jacoby は、活動的の市民教育に以下のような基準を設けました⁸⁾。

1. 社会的問題について詳しい情報に基づく観点を持つために、他人、自身そして環境から学ぶ。
2. 多様性を重視し、違いが生む隔りを取り去る。
3. 礼儀正しく論争する。
4. 政治過程に積極的に参加する。
5. 市民生活、公的問題解決、地域社会サービスに積極的に参加する。
6. 団体のリーダーやメンバーとしての責任を担う。
7. 共感、倫理、価値、社会的責任感を養う。

7) ここでは以下のサイトを参照のこと。 <http://www.compact.org/category/resources/>

8) Jacoby, B. (2009), "Civic Engagement in Today's Higher Education: An Overview," in *Civic Engagement in Higher Education* (pp. 5-30). San Francisco, CA: Jossey-Bass.

8. 地域における、そして世界における社会正義を推進する。

この条件のひとつでも満たしている大学を、Jacoby は活動的市民教育を行っている大学と認めています。私は、日本の大学の活動的市民教育についての論文を書いているのですが、和光大学はこの中の少なくとも5つぐらいは満たしていると考えました。皆さんはいかがお考えでしょうか。

皆さんとの討論が今日だけに終わらず、これからずっと続いていくことを願っています。教育者は自国の他の大学の同僚と活動的市民教育のアイディアを交換するだけでなく、国際的討論にのぞむべきだと私は思います。民主主義は世界的な思想ですから、よい民主的市民を育てることに力を入れている私たちも、世界的規模で考えるべきなのです。

[Katherine TEGMEYER PAK]